

芥川龍之介

奉教人の死



奉教人の死

たとい三百歳の齡を保ち、楽しみ身に余ると云うとも、
未来永々の果しなき楽しみに比ぶれば、夢幻の如し。

— (慶長訳 *Guia do Pecador*) —

善の道に立ち入りたらん人は、御教にこもる不可思議
の甘味を覚ゆべし。— (慶長訳 *Imitatione Christi*) —

去ぬる頃、日本長崎の「さんた・るちや」と申す「え
けれしや」（寺院）に、「ろおれんぞ」と申すこの国の
少年がござった。これは或年御降誕の祭の夜、その「え
けれしや」の戸口に、餓え疲れてうち伏して居ったを、
参詣の奉教人衆が介抱し、それより伴天連の憐みにて、
寺中に養われる事となつたげでござるが、何故かその身
の素性を問えば、故郷は「はらいそ」（天国）父の名は
「でうす」（天主）などと、何時も事もなげな笑に紛ら

いて、とんとまことは明した事もござない。なれど親の代から「ぜんちよ」（異教徒）の輩であらなんだ事だけは、手くびにかけた青玉の「こんたつ」（念珠）を見ても、知れたと申す。されば伴天連はじめ、多くの「いるまん」衆（法兄弟）も、よも怪しいものではござるまいとおぼされて、ねんごろに扶持して置かれたが、その信心の堅固なは、幼いにも似ず「すぺりおれす」（長老衆）が舌を捲くばかりであったれば、一同も「ろおれんぞ」は天童の生れがわりであろうずなど申し、いづくの生れ、たれの子とも知れぬものを、無下にめでいつくしんで居

ったげでござる。

して又この「ろおれんぞ」は、顔かたちが玉のように清らかであつたに、声さまも女のように優しかつたれば、一しお人々のあわれみを惹いたのでござろう。中でもこの国の「いるまん」に「しめおん」と申したは、「ろおれんぞ」を弟のようにもてなし、「えけれしや」の出入りにも、必仲よう手を組み合せて居つた。この「しめおん」は、元大名に仕えた、槍一すじの家がらなものじや。されば身のたけも抜群なに、性得の剛力であつたに由つて、伴天連が「ぜんちよ」ばらの石瓦にうたるるを、防

いで進ぜた事も、一度二度の沙汰ではごさない。それが「ろおれんぞ」と睦じゆうするさまは、とんと鳩にならずむ荒鷲のようであつたとも申そうか。或は「ればのん」山の檜に、葡萄かづらが纏いついて、花咲いたようであつたとも申そうず。

さる程に三年あまりの年月は、流るるようにすぎたに由つて、「ろおれんぞ」はやがて元服もすべき時節となつた。したがその頃怪しげな噂が伝わつたと申すは、「さんた・るちや」から遠からぬ町方の傘張の娘が、「ろおれんぞ」と親しゆうすると云う事じゃ。この傘張の翁も

天主の御教を奉ずる人故、娘ともども「えけれしや」へは参る慣であつたに、御祈の暇にも、娘は香炉をさげた「ろおれんぞ」の姿から、眼を離したと申す事がござない。まして「えけれしや」への出入りには、必髪かたちを美しゆうして、「ろおれんぞ」のいる方へ眼づかいをするが定であつた。さればおのずと奉教人衆の人目にも止り、娘が行きずりに「ろおれんぞ」の足を踏んだと云い出すものもあれば、二人が艶書をと리카わすをしかと見とどけたと申すものも、出て来ただでござる。

由つて伴天連にも、すて置かれず思されたのでござる

う。或日「ろおれんぞ」を召されて、白ひげを噛みながら、「その方、傘張の娘と兎角の噂ある由を聞いたが、よもやまことではあるまい。どうじゃ」ともの優しゅう尋ねられた。したが「ろおれんぞ」は、唯憂わしげに頭を振って、「そのような事は一向に存じよう筈もござらぬ」と、涙声に繰返すばかり故、伴天達もさすがに我を折られて、年配と云い、日頃の信心と云い、こうまで申すものに偽はあるまいと思されたげでござる。

さて一応伴天連の疑は晴れてじゃが、「さんた・るちや」へ参る人々の間では、容易に、ところこの沙汰が絶え

そうもござない。されば兄弟同様にして居った「しめおん」の気がかりは、又人一倍じゃ。始はかような淫な事を、ものものしゅう詮議立てするが、おのれにも恥しゅうて、うちつけに尋ねようは元より、「ろおれんぞ」の顔さえまさかとは見られぬ程であつたが、或時「さんたるちや」の後の庭で、「ろおれんぞ」へ宛てた娘の艶書を拾うたに由つて、人気ない部屋にいたを幸、「ろおれんぞ」の前にその文をつきつけて、嚇しつ賺しつ、さまさまに問いただいた。なれど「ろおれんぞ」は唯、美しい顔を赤らめて、「娘は私に心を寄せましたげでござ

れど、私は文を貰うたばかり、とんと口を利いたこともござらぬ」と申す。なれど世間のそしりもある事でござれば、「しめおん」は猶も押しして問い詰ったに、「ろおれんぞ」はわびしげな眼で、じつと相手を見つめたと思えば、「私はお主にさえ、嘘をつきそうな人間に見えるような」と、咎めるように云い放って、とんと燕か何ぞのように、その儘つと部屋を出て行ってしもうた。こう云われて見れば、「しめおん」も己の疑深かったのが恥しゅうもなつたに由つて、悄悄その場を去ろうとしたに、いきなり駈けこんで来たは、少年の「ろおれんぞ」じゃ。

それが飛びつくように「しめおん」の頸を抱くと、喘ぐように「私が悪かった。許して下さい」と、囁いて、こなたが一言も答えぬ間に、涙に濡れた顔を隠そう為か、相手をつきのけるように身を開いて、一散に又元来た方へ、走って往んでしもうたと申す。さればその「私が悪かった」と囁いたのも、娘と密通したのが悪かったと云うのやら、或は「しめおん」につれのうしたのが悪かったと云うのやら、一円合点の致そうようがなかつたとの事でござる。

するとその後間ものう起つたのは、その傘張の娘が孕

つたと云う騒ぎじや。しかも腹の子の父親は、「さんた・るちや」の「ろおれんぞ」じやと、正しゆう父の前で申したげでござる。されば傘張の翁は火のように憤って、即刻伴天連のもとへ委細を訴えに参った。こうなる上は「ろおれんぞ」も、かつふつ云い訳の致しようがござない。その日の中に伴天連を始め、「いるまん」衆一同の談合に由って、破門を申し渡される事になった。元より破門の沙汰がある上は、伴天連の手もとをも追ひ払われ、る事でござれば、糊口のよすがに困るのも目前じや。したがかような罪人を、この儘「さんた・るちや」に止め

て置いては、御主の「ぐるおりや」（栄光）にも関る事ゆえ、日頃親しゅう致いた人々も、涙をのんで「ろおれんぞ」を追い払ったと申す事でござる。

その中でも哀れをとどめたは、兄弟のようにして居った「しめおん」の身の上じゃ。これは「ろおれんぞ」が追い出されると云う悲しさよりも、「ろおれんぞ」に欺かれたと云う腹立たしさが一倍故、あのいたいけな少年が、折からの凧が吹く中へ、しおしおと戸口を出かかったに、傍から拳をふるうて、したたかその美しい顔を打った。「ろおれんぞ」は剛力に打たれたに由って、思わ

ずそこへ倒れたが、やがて起きあがると、涙ぐんだ眼で、空を仰ぎながら、「御主も許させ給え。『しめおん』は、己が仕業もわきまえぬものでござる」と、わななく声で祈ったと申す事じゃ。「しめおん」もこれには気が挫けたのでござろう。暫くは唯戸口に立って、拳を空にふるうて居ったが、その外の「いるまん」衆も、いろいろととりないたれば、それを機会に手を束ねて、嵐も吹き出でようず空の如く、凄じく顔を曇らせながら、悄悄「さんた・るちや」の門を出る「ろおれんぞ」の後姿を、貪るようにきつと見送って居った。その時居合わせた奉教

人衆の話を伝え聞けば、時しも凧にゆらぐ日輪が、うなだれて歩む「ろおれんぞ」の頭のかなた、長崎の西の空に沈もうず景色であつたに由つて、あの少年のやさしい姿は、とんと一天の火焰の中に、立ちきわまつたように見えたと申す。

その後の「ろおれんぞ」は、「さんた・るちや」の内陣に香炉をかざした昔とは打つて變つて、町はずれの非人小屋に起き伏しする、世にも哀れな乞食であつた。ましてその前身は、「ぜんちよ」の輩には穢多のようにさげしまるる、天主の御教を奉ずるものじや。されば町を

行けば、心ない童部に嘲らるるは元より、刀杖瓦石の難に遭うた事も、度々ござるげに聞き及んだ。いや、嘗つては、長崎の町にはびこつた、恐しい熱病にとりつかれて、七日七夜の間、道ばたに伏しまるんでは、苦み悶えたと申す事でござる。したが、「でうす」無量無辺の御愛憐は、その都度「ろおれんぞ」が一命を救わせ給うたのみか、施物の米銭のない折々には、山の木の實、海の魚介など、その日の糧を恵ませ給うのが常であつた。由つて「ろおれんぞ」も、朝夕の祈は「さんた・るちや」に在つた昔を忘れず、手くびにかけた「こんたつ」も、

青玉の色を変えなかつたと申す事じや。なんの、そののみか、夜毎に闌たけて人音も静まる頃となれば、この少年はひそかに町はずれの非人小屋を脱け出だいて、月を踏んでは住み馴れた「さんた・るちや」へ、御主「ぜす・きりしと」の御加護を祈りまいらせに詣でて居った。

なれど同じ「えけれしや」に詣ずる奉教人衆も、その頃はとんと「ろおれんぞ」を疎んじはてて、伴天連はじめ、誰一人憐みをかくるものもござらなんだ。ことわりかな、破門の折から所行無慚の少年と思いこんで居ったに由って、何として夜毎に、独り「えけれしや」へ参る

程の、信心ものじやとは知らりようぞ。これも「でうす」
千万無量の御計らいの一つ故、よしない儀とは申しなが
ら、「ろおれんぞ」が身にとってはいみじくも亦哀れ
な事でござった。

さる程に、こなたはあの傘張の娘じや。「ろおれんぞ」
が破門されると間もなく、月も満たず女の子を産み落い
たが、さすがにかたくなしい父の翁も、初孫の顔は憎か
らず思うたのでござろう、娘ともども大切に介抱して、
自ら抱きもしかかえもし、時にはもてあそびの人形など
もとらせたと申す事でござる。翁は元よりさもあろうず

なれど、ここに稀有なは「いるまん」の「しめおん」じや。あの「じゃぼ」（悪魔）をも挫がうず大男が、娘に子が産まれるや否や、暇ある毎に傘張の翁を訪れて、無骨な腕に幼子を抱き上げては、にがにがしげな顔に涙を浮べて、弟と愛くしんだ、あえかな「ろおれんぞ」の優姿を、思い慕って居ったと申す。唯、娘のみは、「さんた・るちや」を出でてこの方、絶えて「ろおれんぞ」が姿を見せぬのを、怨めしゅう歎きわびた気色であつたれば、「しめおん」の訪れるのさえ、何かと快からず思うげに見えた。

この国の諺にも、光陰に閑守なしと申す通り、ところ
する程に、一年あまりの年月は、瞬くひまに過ぎたと思
召されい。ここに思いもよらぬ大變が起つたと申すは、
一夜の中に長崎の町の半ばを焼き払つた、あの大火事の
あつた時じゃ。まことにその折の景色の凄じさは、末期
の御裁判の喇叭の音が、一天の火の光をつんざいて、鳴
り渡つたかと思われるばかり、世にも身の毛のよだつも
のでござつた。その時、あの傘張の翁の家は、運悪う風
下にあつたに由つて、見る見る焰に包まれたが、さて親
子眷族、慌てふためいて、逃げ出して見れば、娘が産ん

だ女の子の姿が見えぬと云う始末じゃ。一定、一間どころに寝かいて置いたを、忘れてここまで逃げのびたのであろう。されば翁は足ずりをして罵りわめく。娘も亦、人に遮られずば、火の中へも馳せ入って、助け出そう気色に見えた。なれど風は益加わって、焰の舌は天上の星をも焦そうず吼りようじゃ。それ故火を救いに集った町方の人々も、唯、あれよあれよと立ち騒いで、狂気のような娘をとり鎮めるより外に、せん方も亦あるまじい。所へひとり、多くの人を押しわけて、馳けつけて参ったは、あの「いるまん」の「しめおん」でござる。これは

矢玉の下もくぐったげな、逞しい大丈夫でござれば、ありようを見るより早く、勇んで焰の中へ向うたが、あまりの火勢に辟易致いたのでござろう。二三度煙をくぐったと見る間に、背をめぐらして、一散に逃げ出した。して翁と娘とが佇んだ前へ来て、「これも『でうす』万事にかなわせたまう御計らいの一つじゃ。詮ない事とあきらめられい」と申す。その時翁の傍から、誰とも知らず、高らかに「御主、助け給え」と叫ぶものがござった。声ざまに聞き覚えもござれば、「しめおん」が頭をめぐらして、その声の主をきつと見れば、いかな事、これは紛

いもない「ろおれんぞ」じゃ。清らかに痩せ細った顔は、火の光に赤うかがやいて、風に乱れる黒髪も、肩に余るげに思われたが、哀れにも美しい眉目のかたちは、一目見てそれと知られた。その「ろおれんぞ」が、乞食の姿のまま、群る人々の前に立って、目もはなたず燃えさかる家を眺めて居る。と思うたのは、まことに瞬く間もない程じゃ。一しきり焰を煽って、恐しい風が吹き渡ったと見れば、「ろおれんぞ」の姿はまっしぐらに、早くも火の柱、火の壁、火の梁の中にはいつて居った。「しめおん」は思わず遍身に汗を流いて、空高く「くるす」（十

字)を描きながら、己も「御主、助け給え」と叫んだが、何故かその時心の眼には、凧に揺るる日輪の光を浴びて、「さんた・るちや」の門に立ちきわまった、美しく悲しげな、「ろおれんぞ」の姿が浮んだと申す。

なれどあたりに居った奉教人衆は、「ろおれんぞ」が健気な振舞に驚きながらも破戒の昔を忘れかねたのでござろう。忽兎角の批判は風に乗って、人どよめきの上を渡って参った。と申すは「さすが親子の情あいは争われぬものと見えた。己が身の罪を恥じて、このあたりへは影も見せなんだ『ろおれんぞ』が、今こそ一人子の命

を救おうとて、火の中へはいったぞよ」と、誰ともなく罵りかわしたのでござる。これには翁さえ同心と覚えて、「ろおれんぞ」の姿を眺めてからは、怪しい心の騒ぎを隠そうず為か、立ちつ居つ身を悶えて、何やら愚しい事のみを、声高にひとりわめいて居った。なれど当の娘ばかりは、狂おしく大地に跪いて、両の手で顔をうずめながら、一心不乱に祈誓を凝らいて、身動きをする気色さえもござない。その空には火の粉が雨のように降りかかる。煙も地を掃って、面を打った。したが娘は黙然と頭を垂れて、身も世も忘れた祈り三昧でござる。

とこうする程に、再火の前に群った人々が、一度にどつとどよめくかと思れば、髪をふり乱いた「ろおれんぞ」が、もろ手に幼子をかい抱いて、乱れとぶ焰の中から、天くだるように姿を現いた。なれどその時、燃え尽きた梁の一つが、俄に半ばから折れたのでござろう。凄じい音と共に、一なだれの煙焰が半空に迸ったと思う間もなく、「ろおれんぞ」の姿ははたと見えなくなって、跡には唯火の柱が、珊瑚の如くそば立ったばかりでござる。

あまりの凶事に心も消えて、「しめおん」をはじめ翁まで、居あわせた程の奉教人衆は、皆目の眩む思いがご

ざった。中にも娘はけたたましゅう泣き叫んで、一度は脛もあらわに躍り立ったが、やがて雷に打たれた人のように、そのまま大地にひれふしたと申す。さもあらばあれ、ひれふした娘の手には、何時かあの幼い女の子が、生死不定の姿ながら、ひしと抱かれて居ったをいかにしようぞ。ああ、廣大無辺なる「でうす」の御智慧、御力は、何とたたえ奉る詞だにござない。燃え崩れる梁に打たれながら、「ろおれんぞ」が必死の力をしばって、あなたへ投げた幼子は、折よく娘の足もとへ、怪我もなくまろび落ちたのでござる。

されば娘が大地にひれ伏して、嬉し涙に咽んだ声と共に、もろ手をさしあげて立った翁の口からは、「でうす」の御慈悲をほめ奉る声が、自らおごそかに溢れて参った。いや、まさに溢れようづけはいであつたとも申そうか。それより先に「しめおん」は、さかまく火の嵐の中へ、「ろおれんぞ」を救おうず一念から、真一文字に躍りこんだに由つて、翁の声は再気づかわしげな、いたましい祈りの言となつて、夜空に高くあがったのでござる。これは元より翁のみではござない。親子を囲んだ奉教人衆は、皆一同に声を揃えて、「御主、助け給え」と、泣く

泣く祈りを捧げたのじゃ。して「びるぜん・まりや」の御子、なべての人の苦しみと悲しみを己がものの如くに見そなわす、われらが御主「ぜす・きりしと」は、遂にこの祈りを聞き入れ給うた。見られい。むごたらしゅう焼けただれた「ろおれんぞ」は、「しめおん」が腕に抱かれて、早くも火と煙とのただ中から、救い出されて参ったではないか。

なれどその夜の大変は、これのみではござなんだ。息も絶え絶えな「ろおれんぞ」が、とりあえず奉教人衆の手に昇がれて、風上にあつたあの「えけれしや」の門へ

横えられた時の事じゃそれまで幼子を胸に抱きしめて、涙にくれていた傘張の娘は、折から門へ出でられた伴天連の足もとに跪くと、並み居る人々の目前で、「この女子は『ろおれんぞ』様の種ではおじやらぬ。まことは妾が家隣の『ぜんちよ』の子と密通して、もうけた娘でござるわいの」と思いもよらぬ「こひさん」（懺悔）を仕った。その思いつめた声さまの震えと申し、その泣きぬれた双の眼のかがやきと申し、この「こひさん」には、露ばかりの偽さえ、あろうとは思われ申さぬ。道理かな、肩を並べた奉教人衆は、天を焦がす猛火も忘れて、息さ

えつかぬように声を呑んだ。

娘が涙をおさめて、申し次いだは、「妾は日頃『ろおれんぞ』様を恋い慕うて居ったなれど、御信心の堅固さからあまりにつれなくもてなされる故、つい怨む心も出て、腹の子を『ろおれんぞ』様の種と申し偽り、妾につらかった口惜しさを思い知らそうと致いたのでおじやる。なれど『ろおれんぞ』様のお心の気高さは、妾が大罪をも憎ませ給わいで、今宵は御身の危さをもうち忘れ、『いんへるの』（地獄）にもまがう火焰の中から、妾娘の一命を辱くも救わせ給うた。その御憐み、御計らい、

まことに御主『ぜす・きりしと』の再来かともおがまれ申す。さるにても妾が重々の極悪を思えば、この五体は忽『じやぼ』の爪にかかつて、寸々に裂かれようとも、中々怨む所はおじやるまい。」娘は「こひさん」を致いも果てず、大地に身を投げて泣き伏した。

二重三重に群った奉教人衆の間から、「まるちり」（殉教）じゃ、「まるちり」じゃと云う声が、波のように起ったのは、丁度この時の事でござる。殊勝にも「ろおれんぞ」は、罪人を憐む心から、御主「ぜす・きりしと」の御行跡を踏んで、乞食にまで身を落いた。して父と仰

ぐ伴天連も、兄とたのむ「しめおん」も、皆その心を知らなんだ。これが「まるちり」でのうて、何でござろう。

したが、当の「ろおれんぞ」は、娘の「こひさん」を聞きながらも、僅に二三度頷いて見せたばかり、髪は焼け肌は焦げて、手も足も動かぬ上に、口をきこう気色さえも今は全く尽きたげでござる。娘の「こひさん」に胸を破った翁と「しめおん」とは、その枕がみに蹲って、何かと介抱を致いて居ったが、「ろおれんぞ」の息は、刻々に短うなって、最期ももはや遠くはあるまじい。唯、日頃と変らぬのは、遙に天上を仰いで居る、星のような

瞳の色ばかりじやや。

やがて娘の「こひさん」に耳をすまされた伴天連は、吹き荒すさぶ夜風に白ひげをなびかせながら、「さんた・るちや」の門を後にして、おごそかに申されたは、「悔い改むるものは、幸じや。何しにその幸なものを、人間の手に罰しようぞ。これより益、『でうす』の御戒を身にしめて、心静に末期の御裁判の日を待ったがよい。又『ろおれんぞ』がわが身の行儀を、御主『ぜす・きりしと』とひとしく奉ろうず志は、この国の奉教人衆の中にあっても、類稀なる徳行でござる。別して少年の身とは

云い——」ああ、これは又何とした事でござろうぞ。ここまで申された伴天連は、俄にはたと口を噤んで、あたかも「はらいそ」の光を望んだように、じつと足もとの「ろおれんぞ」の姿を見守られた。その恭しげな容子は、どうじゃ。その両の手のふるえざまも、尋常の事ではござるまい。おう、伴天連のからびた頬の上には、とめどなく涙が溢れ流れるぞよ。

見られい。「しめおん」。見られい。傘張の翁。御主「ぜす・きりしと」の御血潮よりも赤い、火の光を一身に浴びて、声もなく「さんた・るちや」の門に横わった、

いみじくも美しい少年の胸には、焦げ破れた衣のひまから、清らかな二つの乳房が、玉のように露れて居るではないか。今は焼けただれた面輪にも、自らなやさしさは、隠れようすべもあるまじい。おう、「ろおれんぞ」は女じゃ。「ろおれんぞ」は女じゃ。見られい。猛火を後にして、垣のように佇んでいる奉教人衆、邪淫の戒を破つたに由って「さんた・るちや」を逐われた「ろおれんぞ」は、傘張の娘と同じ、眼なざしのでやかなこの国の女じゃ。

まことにその刹那の尊い恐しさは、あたかも「でうす」

の御声が、星の光も見えぬ遠い空から、伝わって来るよ
うであつたと申す。されば「さんた・るちや」の前に居
並んだ奉教人衆は、風に吹かれる穂麦のように、誰から
ともなく頭を垂れて、悉「ろおれんぞ」のまわりに跪い
た。その中で聞えるものは、唯、空をどよもして燃えし
きる、万丈の焰の響ばかりでござる。いや、誰やらの啜
り泣く声も聞えたが、それは傘張の娘でござろうか。或
は又自ら兄とも思つた、あの「いるまん」の「しめおん」
でござろうか。やがてその寂寞たるあたりをふるわせて、
「ろおれんぞ」の上に高く手をかざしながら、伴天連の

御経を誦ずせられる声が、おごそかに悲しく耳にはいつた。して御経の声がやんだ時、「ろおれんぞ」と呼ばれた、この国のうら若い女は、まだ暗い夜のあなたに、「はらいそ」の「ぐるおりや」を仰ぎ見て、安らかなほほ笑みを唇に止めたまま、静に息が絶えたのでござる。……

その女の一生は、この外に何一つ、知られただけに聞き及んだ。なれどそれが、何事でござろうぞ。なべて人の世の尊さは、何ものにも換え難い、刹那の感動に極まるものじゃ。暗夜の海にも譬えようず煩惱心の空に一波をあげて、未出ぬ月の光を、水沫の中に捕えてこそ、生

きて甲斐ある命とも申そうず。されば「ろおれんぞ」が最期を知るものは、「ろおれんぞ」の一生を知るものではござるまいか。

二

予が所蔵に関する、長崎耶穌会出版の一書、題して「れげんだ・おうれあ」と云う。蓋し、*LEGENDA AUREA* の意なり。されど内容は必しも、西欧の所謂「黄金伝説」ならず。彼土の使徒聖人が言行を録すると共に、併せて

本邦西教徒が勇猛精進の事蹟をも採録し、以て福音伝道の一助たらしめんとせしものの如し。

体裁は上下二卷、美濃紙摺草体交り平仮名文にして、印刷甚しく鮮明を欠き、活字なりや否やを明にせず。上卷の扉には、羅匈字にて書名を横書し、その下に漢字にて「御出世以来千五百九十六年、慶長二年三月上旬鏤刻也」の二行を縦書す。年代の左右には喇叭を吹ける天使の画像あり。技巧頗幼稚なれども、亦掬す可き趣致なしとせず。下卷も扉に「五月中旬鏤刻也」の句あるを除いては、全く上卷と異同なし。

両巻とも紙数は約六十頁にして、載のする所の黄金伝説は、上巻八章、下巻十章を数う。その他各巻の巻首に著者不明の序文及羅匈字を加えたる目次あり。序文は文章雅馴ならずして、間々欧文を直訳せる如き語法を交え、一見その伴天連たる西人の手になりしやを疑わしむ。

以上採録したる「奉教人の死」は、該「れげんだ・おうれあ」下巻第二章に依るものにして、恐らくは当時長崎の一西教寺院に起りし、事実の忠実なる記録ならんか。但、記事中の大火なるものは、「長崎港草」以下諸書に徴するも、その有無をすら明にせざるを以て、事実の正

確なる年代に至っては、全くこれを決定するを得ず。

予は「奉教人の死」に於て、発表の必要上、多少の文飾を敢てしたり。もし原文の平易雅馴なる筆致にして、甚しく毀損せらるる事なからんか、予の幸甚とする所なりと云爾。

日本文学電子図書館

奉教人の死

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：『報恩記』而立社

大正13年11月15日 印刷

大正13年11月25日 発行



日本文学電子図書館